

てたる數奇屋にて、松を下より見る處能として、座敷の内より是を見度よしおほせられ候に付、引窓にして戸を引、利休あけられ候、此窓むかしは大和窓と申候よし、左近物がたりに被仕候、其後こまいを切、杖にて突揚候よし之事、

〔茶傳集 十二〕一突上グ、其町屋堀にて明り取べき様なく、屋根を切抜、明りを取たるを見て、夫を利休廣サ恰好を極て、數奇屋ニ仕候由被仰候、

〔南方錄 二〕反古張附腰張高下

古もありたる事也、誠の反古を用べし、裏書等々多くては悪し、墨跡目移り等能々心得有べし、腰張高下、二疊敷杯は一段と高く張たるに利あり、妙喜庵茶室の腰張杯高し、

〔茶傳集 十一〕一腰張の事、湊紙ふつくり、其長にて張も吉、但三丈ケ合テ三尺三寸四分也、狹キ座敷は腰張高キが能也、中敷居など有所にては、切合て二丈ケにも半にもする也、長く紙を繼て一方を張て吉、無左候へば繼目一所に依て、前後同廣サニ成て悪シ、紙の繼目二分計也、

一四疊半の座敷は、みの紙一枚丈ケ、又一枚半にもはる也、繼目右同じと申候、

〔茶道筌蹄 一〕小座鋪之部

戸 夜咄は皆戸を入る、見付のク、バリの上窓ばかり障子なり、客に入る處を知らすため也、障子 昔は下さまの障子は竹を骨にせし故、小座敷に花て竹骨を用ゆ、

竹障子の骨は、横は皮付を上へ、堅は一本ならば皮を見付、三本は中の皮を見付、左右の二本は向ひ合せ、二本とも向ふへ合す、尤竹障子は小障子に限る、木にて作るは貴人方なり、略 中

簾 小坐しきは皮付の葎、廣間は皮ムキの葎、白竹は勿論、伊豫竹にてもよし、

襖 いにしへは出合なし、千家は黒塗縁にかぎる、唐紙形は桐、白張の袋ばりは引違ひに限る、青土佐の袋張四枚は、江岑好の三疊に用ゆ、原叟好也、

戸障子

腰張